にて黒津船といふ歟。』といひ、富田景周の越登賀三州志、森田平次の北海邊要考皆同說である。しかし寧樂・平安の朝に黒船の語を用ひたことは決してないから、黒津船の語から推して之を渤海著津の地とするは謂れなきことである。第二に越登賀三州志の追考に、『比樂湊は延喜式にも出づれば、加賀の大湊なり。然れば若し此の客使來著の岸は、此の湊に非ざる歟。一書に、額乙丸領に碇河といふ遺名あり。是は古へ手取川の此の邊を流るゝ頃、唐船著岸、碇を下せし故の名なりといふ說あり。彼是參考に備ふ。』というてゐる。額乙丸の地は海岸を距ること八粁餘。手取川がこゝを流れたことの慮實を論ずるまでもなく、海船の入るべき所ではない。若しそれ比樂湊に至つては、何人も關心せざるべからざる所で、渤海使が加賀著岸中の幾回かは、必ずこゝに繫泊したであらうが、吾人は比樂の外に大野湊も亦その一つであつたことを言ひ得る。そは正倉院文書天平三年二月の越前大稅帳加賀郡の斷片に、『送渤海郡人食祈五十斛』とあるから、その著發の港は之を今の河北・石川二郡に求むべきであり、而して二郡中船舶の繫泊に可なる所は、河北潟の舊排水口にあつた大野湊の外はないのである。この地延喜式内大野湊神社の所在であり、相應に良港であつたと思はれる。彼の比樂湊は、弘仁十四年江沼郡の五郷二驛を割いて能美郡を置いた時、比樂驛はその二驛中の一つであつたから、港津も亦舊江沼郡の所管で、前記天平三年の加賀郡と沒交渉であらう。

ホツガンジ 發願寺　江沼郡三ッにあつて、眞宗東派に屬する。

ホツガンジ 發願寺　河北郡高松に在つて、眞宗東派に屬する。

ホツガンジ 發願寺　珠洲郡松波に在つて、眞宗西派に屬する。

ホツケジ 法華寺　鳳至郡柳田に在つて、眞言宗に屬する。大永二年榮範の開基。能登名跡志に、『此寺(安養寺)の隱居地に法華寺とて、近郷の眞言の大寺なり。本尊藥師如來の願像は大佛にて、堀田の中より出給ふ也。』とある。寺藏に、不動明王座像体高七八糎があつて、平安末期の作と認められ、もと護摩堂に安置せられたもの。寄木造内刳、衣紋淺く、粗朴な作風で、大正十三年八月同地白山神社の所有として國寶に指定せられたが、昭和四年五月當寺に移管せられた。

ホツケダニ 法華谷　鹿島郡小島の内である。前田利家入部の際、富田景政が命を奉じて、山地を法華宗寺院の屋敷に與へたもので、そこには本行寺・印勝寺・寶相寺・上慶寺・本興寺・本延寺・長嶺寺・長久寺・長興寺・成蓮寺・妙國寺の十一ヶ寺がある。

ホツケドウ 法華堂　羽咋郡今濱の百姓。能登誌に、『今濱に法華堂とて古き百姓あり。此者むかし細見村にありし者にて、其頃日蓮上人の弟子日像上人北國へ下向ありし時、此者の家に滯在有て、衆生に大乘の法味を說き聞かせらる。故に今に法華堂と呼べり。』とある。

ホツシンジ 發心寺　金澤弓ノ町に在つて、眞宗東派に屬する。初め安江木町・田丸町に在つたが、大正三年今の地に移つた。

ホツタサブロエモン 堀田三郎右衞門　初めて二百石を受けて加賀藩に仕へ、延寶五年歿。子孫藩に世襲した。

ホツタシンヱモン 堀田新右衞門　前田利家に仕へて二百石を受けた。子富左衞門は富山藩臣となり、その次子新右衞門は配分知百石を得て金澤に歸つたが、新右衞門の孫勘兵衞享保十一年逐電して斷絶した。

ホテイイシ 布袋石　鹿島郡能登島の野崎に產し、自然に布袋の如き形狀をなしてゐる。珠洲郡に產する佛体石と同一種類に屬する。→ネブリイシ　毬り石。

ホトケアナ 佛穴　珠洲郡布浦のうち比那にある。能登名跡志に、『比那といふに佛穴といふ洞あり。南向にて、磯の松島・高麗島といふて風景いはん方なし。閑靜にして奥州松島の見佛上人來り給ひて、三年まで此洞に住み給ひて、其歇に、三年までをり重ねつる布浦をけふたちそめていつかきて見ん　見佛上人。西行撰集抄に、西行此上人にあひ給へるは、能登國いなやつの郡、洞は南向とあり。能登國にいなやつの郡なし。案ずるに須津郡と書きていなやつの訓あるやいかゞ。』と記するが信じらぜぬ。

ホトケイシ 佛石　→ブツタイセキ　佛体石。

ホトケガハラ 佛ヶ原　→ホトケノハラ　佛ノ原。

ホトケギ 佛木　羽咋郡土田庄に屬する部落。能登名跡志に、『佛木村は山中に在。元は佛切村といへり。是は餓山和尙の弟子梅山禪師、此所にて盜賊に逢ひ給ひし時、守佛の觀世音身代りに立給ひし故也。越前國松尾瀧澤寺は梅山和尙の開基也。』と見え、越登賀三州志に、永祿二年三月溫井景隆・三宅長盛等羽咋郡へ出兵した時、長續連之を迎へ討ち、佛木に於いて勝利を得たとある。

ホトケゴゼン 佛御前　平清盛に寵せられたといふ白拍子佛の出生地は、今の能美郡原で、昔は佛ノ原と言うた所であるといふ。この地加賀の國府に近く、王朝地方文化の中心であつたから、かゝる名妓を出したのかも知れない。越登賀三州志には、『邑長の家、佛御前の像尺有餘の者を貯ふ。』と記し、佛御前事蹟記に、その像が寶永以前には、村より東北の山腰に二三間の堂に納めてあつたとのことを述べて居る。佛ノ原を佛御前の出生地であるとせられたことは頗る古く、謠曲にも既に材を之に取つて居るのだから、信じていゝと思はれるが、木像は近代に謠曲によつて生まれたものであらう。

ホトケゴゼンジセキキ 佛御前事跡記　一册。能美郡原の道場にある佛御前像の緣起で、寶永中邑民宗左衞門の記したものである。

ホトケジマ 佛島　鹿島郡大泊のうち柳浦の海岸から一〇〇米の沖に在る。廻り五〇米、高さ一〇米。

ホトケダニ 佛谷　鹿島郡佐々波の山中に在る。その間に佛像に似た自然の岩石があつて、佛岩と名づけられる。

ホトケノウラ 佛ノ浦　鳳至郡鵜入から同領小字瀧波に至る間の海濱をいふ。石佛でもあつたのであらう。

ホトケノハラ 佛ノ原　源平盛衰記安元三年白山神輿振の條に、佛ヶ原金劍宮に神輿を据ゑたとあり、又廻國雜記には、『ほとけの原といへる所を過侍るとて、我たのむ佛の原に今きてぞ行ふ道のかひぞしらるゝ。』と見え